靴の歴史散歩㊸

皮革産業資料館　常任委員　稲　川　　　實

記念室ホールの、胸像に向って右側の壁には、木製の立派な書棚が二つ置かれている。これは、西村勝三関連の文献や資料を、収蔵保管するために設けられた書庫である。

ここの収蔵資料については、『靴の歴史散歩』でも、⑫（1989年３月発行）で「明治10年の銀座伊勢勝売場の製靴注文帳」、㉗（1992年12月発行）では「靴工・列馬耳尚(レマルシヤン)君之碑の碑文掛軸」を紹介。そして最近では㊿（2001年３月発行）で『西村勝三翁の石像』と題する『油彩画』など合わせて三点も、掲載の協力をいただいている。

しかしまだこの他にも、未確認の収蔵品があるように思えてならないので、今回は特に時間をかけて、ゆっくりと、検分させていただくことにした。

そしてその成果の第一号が、この古びた一枚の褒状（明治10年内国勧業博覧会）である。（掲載の写真参照）

褒状に添付されている事務局の未歴メモによれば、〈昭和48年５月２日　福島叶之輔氏が来所保管を託さる〉とあり〈祖父　福島縫太郎　練馬村出身　靴職人　24才のとき出品　42才で死去〉と続く。

当の寄託者は〈福島叶之輔氏　明治38年生まれの69才〉とあって、名刺も貼り付けられている。練馬区で自動車整備工場を経営しておられる方である。

このメモはありがたいことに、当時寄託を報じた『靴商工新聞』の切り抜きまで、貼り付けられているから、処理は丁寧である。

寄託のいきさつを知るために、その記事を転載し正確を期したい。

《▶文字通り“古色蒼然”たる明治10年（1877年）の褒状を、日本靴連盟へもちこんできた人があった。「祖父が第一回内国勧業博覧会からもらったものですが、連盟で保存してくれませんか」という。

▶わけをきくと、この人の祖父は東京府下練馬村の福島縫太郎さんという靴職人。内国勧業博には多くの靴工が“登竜門”として出品したことは『靴産業百年史』にくわしいが、当時福島さんは24才の若さ、褒状には「其價廉ニシテ製作モ亦佳ナリ」と記され、内務卿大久保利通の署名と印判のある珍しい褒状。

▶靴工縫太郎さんの息子さんは農業に転じ、孫の叶之輔さんは、練馬区３丁目に自動車整備工場を経営しており「宝のもちくされになってはもったいないので…」というので、靴連盟ではこの褒状を西村記念室に飾って、遺重な資料として永く保存することとなった。》（1973年６月21日号）と結んでいる。

第一回内国勧業博覧会（1877年）の古色蒼然たる褒状